
黒い咆哮

要徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い咆哮

【Nコード】

N0582M

【作者名】

要徹

【あらすじ】

群れから追放された穢れた黒い狼、ロー。生まれた時より孤独であった彼は、ある日一人の少女と出う。初めは彼女を敬遠していたローであったが、少女の純粋さに、次第に心惹かれていく。狼の群れに起こった事件と人間世界が交錯するファンタジー。

R o a r 1（前書き）

この作品は、作者『要徹』が小説の創作活動初期に書いたものです。初期の作品である為、表現、構成などが稚拙ではありますが、当時の私の作風を尊重し、誤字、脱字以外のチエックを行っておりません。以上のことをご了承の上、お読みください。

R o a r 1

あの狼は、いつも孤独だった。

ここは、酷寒の地。

雄大な銀世界が一面に広がる北の国。

険しい山々が連なる土地。

山麓の村まで降りて行けば、狩猟を主な業とする民族が住んでいる。彼らは真つ黒な服に身を包み、狩りを行う。攻撃的で、野蛮な民族だ。

そして、険しい山々には、数十匹の狼の群れが住んでいる。

彼らは、その土地に住む数少ない獲物を食し生き延びている。もちろん、ここまで狩りに来る人間たちも例外ではない。いわば、彼らは人間たちと敵対関係にある、と言っても過言ではない。食うか食われるか、そんな世界である。

いつも生死の淵に立たされている彼らにとって、人間という存在は忌み嫌うべきものだった。人間という強大な存在のせいで、土地を追われ、獲物を奪われ、常に気の抜けない、緊張した生活を営まなければならないのだから。

しかし、そんな彼らでも愛を育む。いや、いつ殺されても、死んでもおかしくないのだから、当然のことなのかもしれない。いくら生きても、死ねばただの肉の塊にすぎない。子孫を残さねば、己の生きた証を残すことは出来ない。

そして今、愛の結晶が生まれ落ちた。

この愛の結晶は、ただの結晶ではない。それは、群れの長である狼、アルファのものだ。アルファは普通の狼とは、一味も二味も違っている。

通常、リーダー格となる狼は攻撃性に乏しいのだが、アルファは

違った。自ら積極的に獲物を仕留めるのだ。その残虐さのすさまじい事。狩りをするアルファの姿は、さながら鬼の様である。見る者を震え上がらせる、恐怖の存在だ。しかしそれとは裏腹に、群れの中では非常に友好的で、温厚な存在であった。鬼とはまったく逆の存在である、仏の顔をも持ち合わせているのだ。

アルファの卓越したところは、なにも性質だけではない。

アルファの率いる群れの狼は、彼一匹を除いて毛色が仄暗い灰色なのに対して、アルファの毛色は真っ白なのである。天候が晴れなれば白銀の世界と擬態して、姿を確認することすらままたらなくなるほどに。アルファは、容姿、性質共に群れの長と称するに相応しい、雄々しき狼なのだ。当然、それを良く思わない嫉妬深い狼も存在するが、一部を除いた狼たちは、彼に快く従っていた。

そんなアルファの寵愛を受けた狼の出産だ。誰がそれを喜ばないでいられようか。だが、全ての命が祝福されて生まれてくるわけではなかった。彼女の生み出した狼は全部で三匹。

二匹は、アルファにそっくりで、毛色も眩いばかりの白銀色。将来群れを率いる、群れを守るリーダーとなるのであろう子供。もう一匹は、あの忌み嫌う人間の色をした、目を疑わんばかりの真っ黒な毛色をした子供だった。

群れの狼たちは驚愕の渦に包まれた。いや、最も驚いたのはアルファとその妻のはずだ。まさか、真っ白な毛色の親と仄暗い灰色の毛色から真っ黒な毛色の子が生まれるとは微塵も思っていなかっただろうから。

群れの狼たちは、それを穢れた子と呼び蔑んだ。いや、影でそう呼んでいた、という方が正しいだろう。それが、普通の狼の種から生まれたのであれば大っぴらに言っていただろうが、なにしろ群れの長の子なのだ。そんなことをアルファの前で口走る者は皆無と言っても良い。

だが、口では言わなくても態度にはあらわれる。人間の世界でもよく見られる光景だ。気に食わない、もしくは異質な人に対しては

無視したり、冷たい態度で接したりする。

アルファも馬鹿ではない。群れの狼たちのあからさまなその態度に気付いてはいた。だが、毛色が黒いという理由だけで我が子を群れから追い出すことなんて出来るはずがない。父親は外面では我が子をよく思っていない風な素振りを見せ続けた。それとは反対に、母親は他の子よりも黒い子供に愛情を注いだ。親心というものは寛大で素晴らしいものなのだ。

黒い子供は、表面化し始める自分への批判も、母親のおかげで耐えることが出来ていた。しかしその親心も、黒い子供の扱い所すらも碎かれる時がきてしまった。

それは、彼らが生まれてから一年後のある日のこと。母親の狼が三匹の子供たちと狩りに出かけた時のことである。途中、子供たちは散り散りになり、母親ともはぐれてしまった。

しばらくの後、三匹のうちの一匹、真っ黒な子供が母親を発見した。だが、発見した母親はただの肉の塊と化していた。真っ黒な子供が呆然としているところに、他の二匹が駆け付けた。

母親は三匹がはぐれていた時に、何者かに殺されてしまったのだ。白銀の雪が朱に染まり、それは酷い有様で殺されていた。もし、これが人間によって殺されたものならば、死体を放置したりはしないだろう。毛皮は寒さを防ぐ服になるし、肉や内臓は自分たちの腹に入れる。殺して、そのまま放置するなんて考えられない。

ということは、群れの狼の誰か。三匹の子供たちの誰か。もしくは、まったく別の生物に殺されたのか。しかし、群れの狼たちは、真っ黒な子にすべての罪を擦り付けた。その地に住む、別の生物に殺されたという可能性も十分にあるのにも関わらずに。

確たる証拠はない。ただ、その場に居合わせたというだけのことだ。真の理由は彼が人間と同じ、黒色をしているからであろう。

この事件を境に、真っ黒な子への非難は表面化した。アルファですら止められないほどに問題が肥大化してしまったのだ。このままでは群れの統制が乱れてしまうと判断したアルファは、真っ黒な子

供を群れから追放する決意をした。

そして、彼は孤独となった。

吹き荒ぶ無情な風が彼に追い打ちをかける。

どれだけ震えても、どれだけ遠吠えをしても、彼の声は誰にも届かない。いつも彼には黒い影だけが付きまとっていた。何度離れろ、と命じてもそれが離れることはない。それは、いつまでも、いつまでも彼に付きまとう。

影が消え去る日はいつなのか。

彼が死する日か。

それとも。

R o a r 2 (前書き)

横書きが読みにくい場合、縦書きに変換してお読みください。

R o a r 2

真っ黒な狼、ローは虎視眈々と獲物を狙っている。

標的は丸々と肥えたヘラジカだ。見た目からして、老齢なヘラジカであることは確かだ。だが、捕獲できる可能性は限りなくゼロに近い。そもそも、狼とは群れで狩りをする動物だ。一匹で獲物を仕留めることは不可能に近い。そのため、彼は群れを追い出されてからというもの、何度も飢えに喘いだことがある。

久しぶりの獲物なんだ。悪く思うなよ。

ローは物陰から飛び出し、ヘラジカ目掛けて走り出した。ヘラジカはローに気付いたのか、全速力で逃げだした。ローは逃がすまいと更にスピードを上げた。ヘラジカとの距離はみるうちに縮まり、飛びかかれば捕獲出来るほどに近づいた。

その時である。ズドンという爆発音が二回聞こえたかと思うと、目の前のヘラジカが倒れ伏した。ローは即座にその場から立ち去り、また物陰へと隠れた。

横取りされた。

物陰からヘラジカを眺めていると、そこへ真っ黒な服に身を包んだ人間二人がやってきた。両方とも、右手に黒く鈍く光る猟銃を持っている。ヘラジカは鉛の制裁を受けたのだ。

「あーあ。狼の方は逃がししまった。村の奴らにどやされるぞ。俺は知らないからな」

「うるさいな。狼はすばしっこいんだ。ヘラジカを仕留めた程度でいい気になるんじゃない」

「はん。仕留められないよりはマシだ。それより、これを持って帰ったらまたあいつがキーキー騒ぐんだろうな」

「そんなこと気にするな。食わなきゃ生きていけないんだ」

男は舌打ちをすると、懷からナイフを取り出しヘラジカを解体し

始めた。ローはその光景を唾を飲み込みながら、物陰から黙って見つめていた。

「よし。これくらいでいいだろう」

「これ以上は持ちきれないしな。もつと人を連れてくるんだっただぜ。そうすれば角も持つて帰ることが出来た」

男はどっこいせ、と言葉を発し、ヘラジカの肉を背負った。

「これで当面は生き延びられるな」

「ああ、だが油断は禁物だ。狩りには毎日出掛けないと。いつ何時何が起こるか分かりやあしない」

「そうだな。今日はもう遅いし、早めに村へ帰ろう。遭難なんてしたら笑いごとじゃないからな」

「はは。そりゃあそうだ」

男たちは大きな笑い声を上げながら下山していった。彼らの去った後には、ヘラジカの角と骨、わずかばかりの肉が放置されていた。

ローは物陰から現れ、肉の方へと歩いて行った。

「もう少しで仕留められたっていうのに」

そんな愚痴をこぼしながら、わずかに残った肉を貪り始めた。所詮は人間が取りこぼした肉だ。食べきるまでに時間はかからないし、満腹にもならない。それを食べ終わるまでに一分とかならなかった。人間たちのおこぼれを食べ終わると、ローはある場所を目指して山を登り始めた。これが彼の日課なのだ。群れを追われた時から毎日そこへ通っていた。さつき横取りされたヘラジカも、そこへ向かう際に偶然発見したのだ。

その場所とは、月が何物にも遮られずに見ることのできる場所だ。この山では、木や他の山々が邪魔をして、光こそ届くものの、普通の方法では月を眺めることが出来ない。だが、今ローが向かっている場所だけは例外なのだ。

「はー、やっと到着だ」

ローが到着した頃には、辺りには漆黒のカーテンが降ろされていた。しかし、その場所だけは月や星々の光に照らされ、雪が淡い光

を帯びて輝いていた。

ローは進むことのできる限界まで前へ進み、天を仰いだ。そして、聞くものすべてを震え上がらせるような恐怖の、涙を誘うような哀愁を帯びた遠吠えをした。二度三度遠吠えをすると、彼はそこに座り込み月に話しかけた。

「こんばんは。今日はほんのちよつとの肉しか食べられなかったよ。お腹がすいて仕方がないよ。こんなにも食料にありつけないのは、僕が黒いからなのかな」

月は何も答えない。寂しげな微笑を浮かべるだけだ。

「君がうらやましいよ。僕の父さんよりも輝いている。真っ白よりも、もっと高貴な色だ。僕も君みたいに輝いていたなら、あそこで幸せに暮らせたのかな。もっと好かれていたのかな」

月が彼を優しく照らす。まるで彼を優しく抱擁するかのように、月明かりがローを包む。

「所詮ないものねだりだね。本当に君には助けられてばかりだよ。群れを追い出された時も僕を励ましてくれて、今もこうやって愚痴を文句一つ言わずに聞いてくれている。君がいなければ、僕は死んでいたかもしれない」

ローは一つため息をつく、その場で丸まり考えた。

どうすれば群れに戻るのか、どうすれば月の様に輝くことが出来るのか、どうすれば忌み嫌う色を消すことが出来るのか。

ローが目を瞑ると、何やら物音がした。雪の上を歩いてくる音だ。ローは起き上がり、月とは逆の方を向くと、ゆらゆらと火の玉がこちらへ向かってくるではないか。人魂ではない。周囲の闇と同化して見づらいが、真っ黒な服を着た小柄な人間がこちらへ向かって歩いてきている。ゆっくりと辺りが松明の光に照らされていく。

ローは身構え、攻撃の体勢を整えた。あの時のヘラジカのようになってしまうのか、そう考えると震えが止まらなかった。だが、それは杞憂に終わった。向かってくる人間は小さな少女だったのだ。こちらに気付いたのか、少女は松明を片手に、目を大きく見開いた

まま微動だにしない。ローの感じていた恐怖はいつの間にか消えていた。

あいつ、真っ黒な服を着ているな。そうか、あいつが父さんたちの嫌う存在なのか。腹も減っているし、丁度良い。

攻撃の体勢を崩さず、じわじわと少女の方へと歩み寄った。少女は逃げようとしないう。恐怖で固まっているのだろうか。ローは体勢を低くし、飛び付く準備を整えた。

今だっ！

ローは一気に腰を落とし、少女に向かって飛びかかった。その瞬間。

「ひゃっ」

ローの突然の襲撃に驚いたのか、少女は松明をローに向かって投げつけた。松明はローの背中に直撃し、毛に火がついた。

「熱い！ 消えろ、消えろよ！」

ローはその場でたたき回った。周囲一帯が雪だったおかげか、背中のは火はすぐに鎮火した。松明で明るかった世界は、また月の光一色に染められた。

「し、死ぬかと思った。くそ、謝れこの野郎！」

どうせ分かるはずもない言葉を少女に投げかけた。

彼の予想通り、彼女は何も答えない。ただこちらをじっと見つめているだけだ。突然の襲撃で放心状態なのだろう。

「聞いているのかよ！」

また少女は何も答えないと思った。だが、少女の反応はローの思っていたものと違った。

「聞いているよ。ごめん、ごめんね。熱かったでしょう」

さつさとローの言葉を無視して去っていくだろうと予想していたのだが、少女は雪の上で倒れているローに近寄り語りかけたのだ。

「は？ お前、俺の言葉が分かるのか？」

「分かるよ。はっきりとね」

ローは啞然とした。まったく意味が分からなかった。逃げること

も襲うことも忘れて、その場で少女を見つめ続けた。

少女は、腰にぶら下げていた麻袋から液体の入った小さな瓶を取り出し、布にその液体を染み込ませ彼に近付けた。液体を染み込ませた布は、何とも形容し難い臭いを発している。

「やめるよ！ 変なものを近づけるな！」

身の危険を感じたローは、飛びあがり、後ずさりをした。液体から漂う香りとその色が、さらに彼の身を引かせた。

「変なものだなんて、失礼ね。これは火傷の薬よ。火傷をさせたのは私なんだから、せめて治療くらいさせてよ」

完全に調子が狂ってしまったローは、その場に座り込んだ。観念したと言っても良い。

「素直でよろしい」

「さっき俺が飛びかかったばかりなのに、なんて立ち直りの早い女だよ。人間とは思えない」

「あの時はあの時。今は今なのよ」

ふん、と自慢げに鼻を鳴らし、再びローの方へ歩み寄った。そして、液体の染み込んだ布を彼の火傷の傷へあてた。毛だらけのなか、火傷を探すのは至難の業のように思われるが、発火した部分だけ禿げているため、とても分かりやすい。

「痛い！」

「我慢してよ！ あんた雄でしょう。しゃんとしなさいよ！」

少女の気の強さに、ローはしばし呆れた。少女は、狼が傍にいるということが認識できていないのかと思わせるほどに堂々としている。

「はい、完了！」

軽い火傷だったからか、薬を塗った瞬間から痛みはひいてきていた。治療の間に、ローは冷静さを取り戻したようだ。

「お前、何で俺の言葉が分かるんだ？ 俺は狼だぞ」

「何よ、狼の言葉が分かったらダメだって言うの？」

少女は赤く染まった頬を膨らませ、拗ねた風な表情をした。赤く

染まる頬が愛しく感じられる。

「誰もそんなことは言っていないだろう」

「まったく、教えてもらう態度つてものがあるでしょう」

なんて女だ、とローは思った。彼が今までに遭遇したことのない特異な少女だ。

「何で俺の言葉が理解出来るのですか。教えてください」

「さあね。私にもよく分からない」

「なんだよそれ」

彼は肩透かしを食らったような気分になっていた。

「あなた、何でこんな所にいるの？ 仲間はずれ？ 狼って、群れで生活しているとはっぴり思っていたわ」

少女の何気ない言葉が彼に突き刺さった。

「あら？ 聞いちゃダメだったかしら。そういえば、あなたの毛色って真っ黒なんだね。この辺で真っ黒な毛色の狼なんて初めて見た」
少女はローの真っ黒な毛を撫でた。ふさふさとした手触りがとても心地よい。

「そりゃあ、俺一匹だけだからな」

「ああ、そうなんだ」

何とも言えない、気の抜けた返事だ。

「じゃあ、最高に珍しい狼ってことね。そんなのに出会えた私って運がいいなあ」

少女の顔は歓喜に満ちている。

ローは少女の反応に少々とまどった。過去に、自分のことを蔑まない存在など、父と母しかいなかったからだ。

「なんだよ、穢れているって思わないのか？」

「そんなこと言ったら、私だって穢れているってことになるじゃない。そんなの御免だわ」

そりゃあそうだとローは心の中で納得していた。

「第一、黒が穢れているなんて誰が決めたのよ。そんな勝手な妄想で穢れているなんて決められたくないわね」

「お前は強いなあ」

ローは、サクサクと雪の上を歩き、月の出ている方へと歩いて行った。そして、月を見上げた。金色の空の舞台では、はらはらと雪が乱舞している。

「あなた、もしかして毛色が黒ってというのがコンプレックスだったりするの？ 群れにいないのも、それが原因だったりして」

「出会ったばかりの人間に話すようなことじゃないだろう」

図星を指されたローは、少し声量を小さくして言った。

「あら、じゃあ今は聞かなくておくわ。けど、今の様子じゃ図星だったよね」

彼女は笑いながらローの隣へと腰を下ろし、彼女も月を見上げた。

「綺麗ね」

空は雲一つなく、月は静かに一匹と一人を優しい金色の光で照らしている。ゆつくりとした時間が彼らを包む。

「お前は、こんな所に何の用なんだよ」

「あたし？」

「お前以外に誰がいるんだよ」

「あら、誰かいるかもしれないじゃない」

少女は辺りを見回してみるが、当然のごとく人一人いない。仕切り直し、と言わんばかりの態度でローの質問に答えた。

「家出してきたのよ。村のみんなが、あたしのことを出来損ないだなんて言うから」

「そんなくだらない理由で家出してきただつて。こりゃあ笑えるね」

口元を歪め、笑ってみるが、心の中ではうんうん、と相槌をうつていた。今の自分もほぼ同じ境遇にいるからだ。

「そんなこととは何よ。割と深刻なんだからね」

少女は薄紅に染まった頬を膨らませている。

「で、何で出来損ないだなんて言われたんだよ。見たところ、糸を紡ぐくらいは出来そうだけど」

ローのこの言葉は皮肉のつもりであつたが、少女はそれにまつた

く気付いていないようだ。

「出会ったばかりの狼に話すようなことじゃありません」

少女は、さっきローに言われたことをそのまま返した。ローはやられた、といった風な顔をしている。一匹と一人は、顔を見合せ笑った。ローは久しぶりに心を許せる存在に出会った気がした。

「はは。それで、これからどうするつもりだよ」

「ん？ 泊まる所なんてないし、ここにも泊まろうかしら」

「おいおい、それは無理だろう。凍死しちゃうぞ」

ローの意見は正しかった。こんなところで泊まるなど自殺行為に等しい。あまりにも無知な発言だ。しかし、少女の次の一言でローの意見は覆された。

「そうでもないんじゃないかしら。あなたにも寝床があるでしょうし、それに良い毛布があるじゃない」

少女の視線はローの方に向けられている。その視線の先には、真っ黒なふかふかとした毛布がこちらを見ている。これさえあれば凍死の心配なんてないだろう。

「俺のことか。まあいいさ。今夜一晩だけだからな。それだけは頭に入れておけよ」

「はあい」

また気の抜けるような返事だ。何も考えていないようで、とても思慮深い。

「そうだ、お前の名前は？」

「私はアマラ。もう分かっているでしょうけど、麓の村に住んでいるわ。あなたは？ 真っ黒な狼さん」

「俺はローだ」

「そう、ローね。短い間だけどよろしくね。握手をしたいところだけど、無理そうね」

「ああ、そりゃあ無理だ」

ローとアマラはまた互いに笑いあい、彼の寝床へと歩を進めた。

ローの寝床は、月の見える丘から少し降りた所の洞穴だ。中は独

特の臭いが漂い、真っ暗で、月の光さえも届かない。

「じめじめしてて、真っ暗。それに、何？ この何とも言えない臭い。すごく変なんだけど」

「文句を言つなよ。寒さが少しでも防げるだけありがたいと思ってくれないと困るぜ」

「それじゃあ、早速だけど寝かせてもらってもいいかしら？ 今日
は歩き続けて疲れちゃって」

アマラは、洞穴の一番奥へと進み、その場に寝転がった。そして、ローの方に手招きをした。毛布になれ、という意味だろう。ローは黙ってアマラの方へ行き、彼女の体に寄り添った。もちろん、ローが洞穴の入口に近い位置にいる。

「あったかい、あったかい」

アマラは安心したのか、さっさと眠りについてしまった。

「しようがないやつだな。俺も眠るとしようか」

ローは大きな欠伸を一つして、目を閉じた。

ローにとって、今日という日は最高に嬉しい日だった。夜空に浮かぶ月以外に、自分の存在を否定しない人物に出会い、語り合える相手が出来たのだ。今までの孤独な生活から抜け出せた、そんな気がしていた。今夜だけ、とは言ったものの、これから一緒にいたい、そんな気持ちが彼に生じていた。そして、ローは睡眠の淵へと飲みこまれていった。

酷寒の地に、暖かな心が芽生えた。

R o a r 3

ローは心地よい夢の中を泳いでいた。

何者にも邪魔されることのない最高の空間。

だが、その空間に異物が紛れ込んだ。

それは、彼が今でも鮮明に覚えているあの時のことだった。

そう、彼が群れを追放された時のことだ。

白銀の世界で二匹の狼が何やら話をしている。

「この間ロムス達だけじゃなくローを狩りに連れて行けって言われたもんで、仕方なく連れて行っただけだな、これがまた下手くそなんだ」

「そりゃあそうだろう。あいつは黒い。穢れた存在に何か出来るなんて期待する方が馬鹿なんだよ」

「本当にな。あいつはこの群れに必要なんだよ。それに比べて、ロムス達の優秀なこと」

群れの狼たちが愚痴をこぼしていると、囁り泣く声が聞こえてきた。その囁り泣きはローのものだった。ローはその会話を陰で聞いていた。心が締め付けられ、心臓をナイフで抉られたかのような痛みと苦しみを味わった。さっきまで話していた狼たちはローの存在に気付くと、そそくさとその場を後にした。

「ねえ、僕を一人にしないでよ」

誰も彼のその言葉に耳を傾けない。皆が彼を避けて歩く。完全なる黙殺。なまじ暴力を奮われるよりも黙殺というものは辛い。肉体的に傷つくことは決してないが、精神は着実に削られていく。

「ねえ、お父さん」

父すら何も応えない。すべてはこの群れの秩序を守る為だった。アルファにとって、彼を追放しない、これ以上の譲歩はありえな

った。我が息子だからといって優遇してしまえば群れの長としての立場がない。

「兄さん」

彼の兄である二匹もローを避けた。黒い毛色は病気だと、黒は穢れた色だと彼を蔑んだ。逆に自分たちは、白は神に近い神聖な存在だと信じてやまなかった。それは群れの狼たちすべてに言えたことだった。

ローは誰もいない、光の一筋も射さない場所で一人涙を流した。自分は生まれてこないほうが良かったのではないか、自分の存在意義はあるのか、と嘆いた。ローは忌々しい色を消そうと、爪で自分の体を傷つけ始めた。これさえ消えてしまえば皆は無視しなくなる、避けなくなる。そんな淡い期待を抱いて。だが、その色は鮮血の色でも消えることはなかった。黒は赤よりも色が強い。

「やめなさい！ 何をそんなに悲しんでいるの」

悲しみに包まれた空間に温かな声が響く。アルファの妻となった狼、ローの母親の声だった。彼女はローの希望だった。いつも母親に慰められてきたローにとって、母親という存在はなくてはならないものになっていた。ローはいつも素直に母親と接してきたが、今日は少し嘘をついた。

「何でもない」

そうは言うものの涙声だ。ローの精いっぱい虚勢であり、嘘だった。母親を心配させたくない一心でついた嘘だった。彼女は傷だらけになったローに近づき、傷口を舐めた。ほのかな鉄の味が彼女の口内に広がる。

「あなたは何も気にすることはないのよ。お父さんも、お兄さんたちも、群れの皆も、本当に大事なことをわかっていないの」

「父さんも、兄さんも、群れの皆も正しいんだよ。僕は何も出来ないんだ。この間だって狩りに連れて行ってもらったけど、何も出来なかった」

「そう」

母親はローの毛を舐めてやった。これが慰めになるとは思えないが、ローの悲しむ姿は母親として放っておけるものではなかった。

「でもね、狩りが出来なくてもいいじゃないの」

「いいわけないじゃないか！ 母さんに何が分かるっていうのさ！」

「私には何も分からないわ。でもね、これだけは分かる」

母親の声は美しい旋律となってローの心に響きわたった。

「あなたは何も悪くないわ。色なんて重要なことじゃない。狩りなんて出来なくても、あなたにしか出来ないことがきつとある。真っ黒なあなただからこそね」

そんなことありえるわけがない。ローは瞬間的にそう感じた。そして、感情の赴くままに母親を突き放した。

「もう僕のこととは放っておいてくれよ！」

そこから去っていくローを母親は悲しげな瞳で見送っていた。その光景を見ていた狼たちは、陰で親不孝者、とローを罵った。

翌日、母親は三匹の子供たちにこう告げた。

「ロー、ロムス、レムス。今日は私が狩りを教えてあげる」

母親は満面の笑みを浮かべて三匹の子供たちを見つめた。真つ先にその言葉に不満を覚えたのはロムスだった。

「なんでローまでついてくるんだよ。こいつ、前に狩りに行った時も足を引つ張ったんだぜ。とんだデキシコナイだ」

たったこれだけの言葉でローの心は引き裂かれた。じわりと涙が溜まっていく。母親はそれを舐めとってやると、ロムスを叱った。

「ロムス！ なんてことを言うの。あなたも上手く狩りを出来ないでしょう？ それなのにローを見下すなんて」

「そのデキシコナイよりは上手いよ。連れて行ってくれた仲間たちも僕たちを褒めてくれていたよ。ローに出来ることなんて何も無いんだ。いや、一つだけあるかな。めそめそと泣くことだ！」

「う、うわああああん」

ローはとうとう泣き出してしまった。群れの狼たちもそれを聞い

てはいたが、誰一人として彼を庇おうとはしなかった。

「やめなさい！ ほら、ローも泣かないの」

母親はローにすり寄り、彼を慰めた。ロムスはそれを鋭い目で睨みつけた。ローはその視線が怖くて仕方がなかった。

「どうしてそんなデキソコナイばかり！ 僕らの方が綺麗だし、狩りも出来るのに！ どうして母さんは僕たちの価値に気付いてくれないのさ！」

ロムスは不快感を露わにした。何故穢れたローが母親の愛情を一身に受けられて、白という神聖な色をしている自分たちが愛を受けられないのか、不思議でたまらなかった。

「綺麗ですって？ あなたは勘違いをしている。重要なことは色や狩りが出来る出来ないじゃないのよ」

「じゃあ何だつて言うんだよ！」

「あなたには言っても分からないわ。さあ、この話はやめにして狩りへ出掛けましょう」

母親はロムスをもう一度舐めてやると、聖母のような笑顔を浮かべた。ローはその笑顔を見ると、自分がちっぽけなことで悩んでいるかのように思われた。不思議と、彼の中に自信が満ち溢れていた。

「うん。ありがとう、母さん。僕、きっと狩りが出来るようになるからね。それから僕にしか出来ないことを探すよ」

「ふふ。じゃあ行きましょうか」

母親とローの姿に、ロムスは鋭い眼光を浴びせていた。

「さあ、ロムスもレムスも。あなたたちが嫌いなわけじゃないのよ。皆大好きよ。早く行きましょう」

嫌々といった風な面持ちで二匹も母親について行った。

四匹が山を登っていると、天候が崩れ始めた。出発当初には青く清々しかった空が、今や不吉な灰色の空と化している。灰色の空を舞台にして、雪が踊りを始めた。もうしばらくすれば舞台は盛り上

がり、吹雪となるだろう。

「まいったわね。これ以上ここにいたら危険かもしれない。今日は中止よ。群れに帰るわ」

母親のその言葉に一番落胆したのはローだった。せっかく決意を新たにしたにも関わらず、出だして雪という小石に躓かされてしまった。

「お前がいるからこんなことになったんだ」

ぼそっとロムスが言い放った。母親には聞こえていなかったが、ローの耳にはしっかりと届いていた。その言葉に少し傷ついたが、母親の言葉を頭の中で反芻して心を落ち着かせた。

山を下っていると、とうとう吹雪が起こり始めた。みるみるうちに視界は悪くなり、白銀の世界のせいか前後左右の区別がまったくつかなくなった。

「母さん！」

ローが母親を呼ぶが、まったく返事がない。どうやらはぐれてしまったようだ。ローは不安に駆られ、そこらじゅうを歩き回った。一刻も早くこの孤独からくる不安を消し飛ばしたかった。視界は白で塞がれ、何も見えない。きっとこの吹雪の先では母親が助けを求めている。そう考えてローは進み続けた。

吹雪が次第に止み、視界が開けてくる頃。ローは仄暗い物体を白い舞台の上で発見した。恐る恐る近寄ると、息も絶え絶えの母親が転がっているではないか。

ローは思わず駆け寄って傷を舐めた。だが、それは無駄だった。

ローは助けを求めて吠えた。彼の口には、多量の血液が付着していた。

ローの助けに気付いたのか、ロムスとレムスが後からやってきた。二匹の姿は雪が付着したのか、恐ろしいまでに全身が真っ白だった。母親のなれの果てを見た彼らも少し言葉を失っていた。そして、彼らから発せられた最初の言葉は、母親を想う言葉ではなかった。

「ローー！ お前、親の肉を喰らうのか！」

ローは慌てふためいた。自分はやってない、そんなことを何度も何度もロムスに言った。しかし、ロムスから帰ってくる言葉は、決まってこうだった。

「汚らしい！ もうお前なんかといられない！」

ロムスとレムスはさっさと山を下っていった。彼らの去った後には、悲しみと虚脱感、母親の肉塊だけが残された。ローは、そこで母親の死を悲しみ続けた。

しばらくの後、ロムスとレムスがその場に帰ってきた。群れの狼たちも全員連れられている。僕はやっていない、そう言おうとしたが、狼たちの視線がローに突き刺さり、彼の言葉を塞いだ。母親の死体を中心にして沈黙がすべてを包んだ。その沈黙を破ったのは父親のアルファだった。

「ロムスとレムスからすべてを聞いた。お前が私の妻を殺したのだな？ どうしてこんなことをしたのだ」

「父さん！僕は母さんを殺してなんかいない！僕が見たときにはお母さんは死んでいたんだ！」

「なら、お前の体にまわりついている血はどう説明する？」

「これは母さんを助けようと思って傷を舐めた時に付いたものだよ！」

「見苦しいぞ、ロー」

群れの狼の一人が口を開いた。

「ロムスとレムスはお前が殺したと言っている。誰がそれを疑うんだ。それに、お前は昨日母親と何やら争っていたじゃないか」

「それは」

ほうら見る、といった顔で群れの狼たちがローを睨みつけている。「追放だ！こんな危険なやつを仲間として置いておくなんて考えられない！」

「俺もそう思うぞ！そもそもあの人間たちと同じ色をしているんだ。まともなわけがない」

「穢れたものは群れから立ち去れ！」

「いや、立ち去るだけだなんて生ぬるい！ 今すぐそいつを食い殺してしまえ！」

狼たちが口々にローを責め立てた。ローは何度も弁明をしようと試みたが、すべて怒声にかき消された。すべての憎しみを帯びた声がローに集中砲火を浴びせる。狼たちの怒りのボルテージは最高潮だ。もう生きていることすら出来ないかもしれない、とローは覚悟した。

「皆、黙るんだ」

アルファのその一言で集中砲火は止んだ。その代わりに、ローに一本の言葉のナイフが刺された。そのナイフは、剣よりも鋭く、強力なものだった。

「ロー。お前を群れから追放する」

群れの狼たちから、何で殺してしまわないのだ、と不満の声が湧き上がる。アルファのこの決断は、我が息子を守る最後の愛情だった。殺せ、という声が未だやまない。

「私の決定は絶対だ。異論は認めない」

「父さん！」

「生きていられるだけでありがたいと思うんだ。さあ、早くここから去れ！」

アルファは大きく吠えた。まるでローのことを息子ではなく、敵と見ていたかのように。周囲の狼たちも、それにつられて吠えた。恐ろしくなったローはその場から逃げだした。そして、どこまでも駆けていった。僕は悪くない。そんなことをいつまでも考えながら。そして黒い自分に、母親を殺される前に発見できなかった自分に罪悪感を覚えて。

R o a r 4

洞穴の外から微かな陽光が差し込む頃、ローは、はつとして目を覚ました。夢とは思えぬほどに鮮明に描かれた夢だった。

「ああ……見たくないものを見ちゃったよ」

ローはその場で上体を起こし、首を振った。そして、むっくりと起き上がり、ローは人間でいう背伸びの動作をした。ふと足元に目をやると、アマラが寝息をたてて眠っていた。余程疲れていたと見える。アマラの寝顔を見ていると、さっきの悪夢は音もなく消え去った。

昨夜は暗くて確認することが出来なかったが、帽子からはみ出した彼女の髪は金色に輝いていた。その美しさが、ローの心を清らかなものとした。アマラは本当に不思議な少女である。ただの命知らずと言えばそれまでだが、狼を目の前にしても臆することなく近づき、こうして一夜を共にした。なにより、狼と会話が出来るところが驚きだ。

ローは洞穴を出ると、もう一度背伸びをして太陽の光を浴びた。彼にとって、これほどまでに清々しい朝は今までになかった。朝目を覚ましても孤独だった。彼に心休まる時なんて、一度たりともなかった。月を眺めている時も例外ではない。いつ、過去に仲間であつた狼たちに襲われるか、いつ人間に撃ち殺されるのか。彼はいつも孤独と身の危険に震えていた。

彼が舌を出して大きな欠伸をしていると、洞穴の中から眠たげな目をしたアマラが金色に輝く髪をポリポリとかきながら出てきた。

彼女の髪は、太陽の光で月の様に輝いて見える。

「おはよう、ロー」

「おはよう」

こんな挨拶を交わすことも、彼にとっては久しぶりだった。群れを追

い出されてからというものの、誰とも口をきいていなかったのだから当然と言えば当然のことだ。

「お腹すいた」

「起きて早々にそれかよ」

ローは呆れた風に鼻で笑った。実を言うところ、ロー自身も空腹だった。自分からこの話を切り出そうとしていたところに、アマラが都合よく切り出してくれたのだ。

「仕方ない。獲物が見つかるかは分からないが、何か狩ってくるか」「ちよつと待つて」

アマラは素早くローの前へ回り込み、彼を睨みつけた。その眼光は少女とは思えぬ、強い意志に満ちていた。ローは思わず後ずさりをした。

「なんだよ」

「狩ってくるっていうことは、生きている動物を殺すんだよね？」

「当たり前じゃないか」

「イヤ！」

その声は、彼が今まで聞いた中で一番大きな音だった。大地が震えたような気さえた。

「な、何だよ。アマラが腹が減ったって言うから、狩りに行くって言うっているんじゃないか」

「それだけは嫌！ 生きた動物を殺すなんてダメ！」

その言葉は、常に弱肉強食の世界に生きてきた彼にとって、考えられないことだった。食わなければ食われる、そんな世界にいないから甘い事が言えるのだ、と彼は思った。

「じゃあ、どうしろって言うんだよ」

「麓の方の森まで降りていけばキノコくらいはあるわ。それを採りに行きましようよ」

麓といえば、人間たちが住む村の間近だ。麓には森があるため、確かに食料は大量にあるだろうが、人間に狩られるという多大なリスクが伴う。食料を取るか、命を取るかそんな選択だ。

「俺が逆に人間の食料になるかもしれないじゃないか」

「大丈夫よ、私がいるもの」

「不安だな」

ローのその不安はもつともなものだ。人間が傍についているからといっても狼をペットとは思わないだろうし、そのまま射殺されても全然おかしいことではない。人間たちにとって、狼は敵でしかない。だが、ローはアマラの真剣な眼差しに心を打たれ、彼女の提案に従うことにした。

「仕方ない。頼むから人間が現れたら説得してくれよ」

「分かってるって!」

アマラの笑顔はとても無邪気で、根拠がないと分かりきっていることでも信じられる、そんな魔力が込められていた。

ローとアマラは麓の森を目指して歩き始めた。ローだけならば、さつさと山を下って行くのだが、今回はアマラがいるためそうはいかない。それともう一つ、彼が足を速めない理由があった。それは、アマラと一分一秒でも長く過ごしたいという願望があるからだ。孤独の闇から救い出してくれたアマラをとて大事に思っていた。だからこそ、さつきの提案も受け入れられた。

「ねえ、もつと早く行こうよ。このままじゃ飢え死にしちゃうよ」

「これが俺の普段のペースなんだ。アマラが麓まで行こう、なんて提案をしなければ適当な獲物を捕まえられたんだぞ? それに俺が走ったら、ついて来られないだろう」

「うっ」

アマラは寂しげな表情を浮かべた。みるみるうちに彼女の眼に涙が溜まっていく。その表情がローの心を強引に突き動かした。

「仕方ない。背中に乗れよ」

アマラの顔がパツと明るくなった。さっきまで溜まっていた涙はいつの間にかどこかへ消え去っていた。

「じゃあ遠慮なく!」

そう言うときアマラはローの背中へ飛び乗った。ローは毛色こそア

ルファと違い真っ黒でも、大きさも力もアルファそっくりだ。厳しい世界で生きてきていたため、肉体はさらに強化されている。大人が跨るとすれば難しいが小さな少女くらいなら軽々と乗せられる。

「しっかり掴まっっているよ」

ローは神風のごとく走りだした。たくましい四本の脚で蹴りあげられた雪は、太陽に照らされダイヤモンドの様に輝き散った。儚いものほど美しいという言葉は本当のようだ。

「早い早い！」

絶叫マシンに初めて乗った子供のような声でアマラが叫んでいる。もちろん恐怖からくる叫びではなく、歓喜の叫びだ。これだけ喜んでもらえれば、ローも本望だろう。

そうして、歓喜の叫びを纏った神風は山を下って行った。

「よし、到着だ」

「はー、面白かった。帰りもお願いしていいかな」

「帰りは腹いっぱいだろう。自分で歩いてくれよ」

「はいはい」

いつもどおりの気の抜けた返事で返す。

「それじゃあ、早速食べられる物を探そうよ」

「はいはい」

アマラの言葉を真似てみるが、どうもしっくりこない。やはり気の抜けた返事はアマラ特有のものか。

こうして、ローとアマラは森の奥地へと進んでいった。ローはいつ人間に見つかるとビクビクしているようだが、アマラはまったく気にしていない様子だ。堂々と森の奥地へ進んでいく。

麓の村の近くに位置する、この草木の生い茂る森には豊富な食料が存在する。動物はもちろんのこと、寒い地方特有の植物が多数存在する。そのためか、村の人間たちは基本的にここで狩猟や採集を行う。昨日のように山まで登ってくる人間はほんの一握りだ。

「おい、ちょっと歩くのが早すぎやしないか」

アマラの背中を見ながらローが言う。こんなに早く歩く元気があるなら背中に乗せてやるんじゃないかなかった、とローは思った。

「だって、お腹が空いているんだもの。ほら！ あそこにキノコが生えているわ」

アマラは、キノコの生えている方へと一目散に走って行った。それに必死でついて行こうとするローの姿が、妙に滑稽に見える。妻の尻に敷かれた夫のようだ。

「ほら、見て見て。これ食べられるかな」

アマラはしゃがみ込み、色鮮やかなキノコの方を指差している。

そのキノコからは芳醇な香りが放たれている。彼女の後ろからローはのぞき込み、しばし思考した後にくう答えた。

「あー。残念だが、それは毒キノコだな」

「え、嘘」

アマラは信じられない、といった風な表情でローの方を見つめている。こんなに綺麗な色のキノコが食べられないはずはない、と更に目で訴えた。

「嘘についても何の得にもならないぞ。そいつを食べると体が痺れて、しばらく動けなくなる。食べたいなら食べてみるといい」

このキノコが毒キノコである、ということはローが身をもって証明していた。群れから追い出された当時、獲物を上手く狩ることが出来ず、仕方なくここまで降りて来てそれを食したことがあるのだ。結果はローの言ったとおりである。彼は体が痺れ、死ぬ思いをしたのだ。

「なあんだ、残念」

「他にも食べるものなんて沢山あるさ」

そんな会話をしていると、森のさらに奥地から動物の叫ぶ声がした。彼らも食事の時間のようだ。ローは内心それをうらやましく感じた。肉でも食いたいな、と。

そんなことをぼんやりと思いつかべっていると、アマラが急に泣き始めた。赤ん坊の様にギャアギャアと。

ローは狼狽した。そんなにも腹が減っていたのかと。

「おい、どうしたんだよ。食料ならちゃんと見つけてやるから泣くなよ」

「そうじゃない」

「なら何だって言うんだ」

アマラは、ローの言葉など聞こえていないかのように泣き続けた。耳をつんざくその泣き声はとても不快だ。

「泣いていちゃ何も分らないぞ」

少し声のトーンを下げて語りかける。

アマラは何度も目をこすり、気を落ち着けた。そして、しばらくすると小さな声で語り出した。

「私、狼の言葉が分かるでしょう」

「ああ、そうだな。それがどうした。あ……」

ローはなぜアマラが泣いていたのか察したようだ。

「アマラ。お前、狼の言葉が理解出来るだけじゃないのか。ということは、さっきの動物の叫び声も」

「そうよ。ローの考えているとおりよ」

「なるほど、彼らの叫ぶ声も理解してしまうってわけか。一体どんな風に聞こえるものなんだ？ 彼らの声は、俺たちには理解できないからな」

「痛い、助けてくれ、死にたくない。彼らは一つの叫びに色んな苦痛を織り交ぜてる。私はそんな声、聞きたくない」

「だから狩りを避けていたのか」

アマラは小さく頷いた。

アマラは、動物の言葉を理解できるが故に苦しんでいたのだ。生きるために仕方がないとはいえ、むやみやたらに狩りをすることを拒んでいた。

「ということは、出来損ないだと言われる理由もこれが。でもよ、珍しい力じゃないか。俺はすごいことだと思うぞ」

「うん、ありがとう」

山麓の村では、男も女も子供も老人も関係なく狩りを行う。もちろん、皆が毎日のように狩りをするわけだ。だが、彼女はそれを拒んだ。当然、村の人間たちはそれを良く思わない。結果、彼女は出来損ないと呼ばれるようになったのだ。

「でもよ、生きるためには仕方がないだろう」

「それでも、私は何も殺したくないし殺されるのを見たくない」

ローは大きなため息をついた。厳しい自然の中で生きてきたローは、こんなに甘えた言葉は聞いたことがなかった。

「自然に生きるっていうことは、こういうことなんだよ。自分に害

を及ぼしたりする奴らは殺さなきゃ、こっちが殺されちまう。食べることも一緒だ。食わなきゃ、食われる。当然のことだ」

「そうだけど」

「この話はもういいだろう。さ、早く食い物を見つけて食べよう。俺も腹が減って仕方がない」

ローは振り返り、サクサクと雪の上を歩き始めた。

その時である。森の奥地から野太い男の声がした。

「女の声がしたが、そこに誰がいるのか？」

人間だ。人間が近づいてくるのだ。声する方から察するに、ローの背後からやってくるようだ。

「どうしよう」

アマラはどうしたら良いのか、まったく分からない風な顔をして狼狽している。ローは落ち着き、声のする方を向いている。彼女の敵であれば、容赦なく噛み殺す気でいた。

人間が姿を見せた。昨日ローからヘラジカを奪った人間だ。やたらと長身で、真っ黒な服を纏い、肩幅の広い、いかにも男といった風な体格をしている。

「アマラ！ 搜したんだぞ」

男は最初、アマラの方しか見ていなかったようだが、すぐにローの存在に気付いた。

「おい、狼がいるじゃないか！ 早くそこから逃げるんだ！」

男は猟銃をローの方へ向け、叫んだ。いつ銃で撃たれてもおかしくない状況にローは追い詰められた。だが、ローもいつでも男に飛びかかる準備は出来ていた。

「カマラ兄さん、違うの！ この狼は……」

カマラ兄さん。その言葉がローの攻撃体勢を解いた。こいつはアマラの敵ではない。ローは瞬時にそれを悟った。

「分かっている。うちの村の家畜を食い殺した狼の一匹だな！ もう容赦しないぞ！」

「彼は家畜を食い殺してなんかいないわ！ 兄さん、話を聞いて！」

「アマラは黙っているんだ！」

カマラと呼ばれる男は、一切聞く耳をもたない。男尊女卑という言葉がとてもよく似合いそうだ。

「家畜を食い殺しただって？ 俺はそんなことしていないぞ！」

ローはアマラにだけ分かる言葉で叫んだ。アマラにはちゃんとした言葉に聞こえるが、カマラには吠えているようにしか聞こえない。「今だって吠えているじゃないか！ お前を食い殺そうとしているんだ。そこをどけ！ これ以上、家畜や森の動物たちを食い荒らされちゃあ困るんだ！」

「ダメ、兄さん！」

カマラは、アマラの声を無視して発砲した。

爆発音が森中にこだまする。その音に驚いた鳥たちが一斉に森から飛び立っていく。

幸い銃弾は外れたらしく、木に丸い穴があいた。

ローは、隙を見てすかさず逃げ出した。恐怖からではない。あの男を食い殺そうと思えば、姿が見えた瞬間に飛びついて殺すことは可能だった。しかし、それを見て悲しむのはアマラである。ローはアマラを悲しませたくはなかった。誰も傷つけずに済む方法は、逃げることしかなかった。

「くそ！ 待ちやがれ！」

猟銃の発砲音と同じくらい大きい声でカマラが叫んでいる。その後も、彼は何発もローに向かって発砲した。それがローに命中することはなかった。

アマラは、その場で泣き崩れていた。ごめんなさい、ごめんなさい、と何度も呟いていた。

R o a r 6 (前書き)

文字数が多く文字が詰まっている為、読みづらいかも知れません。
その場合は縦書きに変換した後に読むと、丁度良いかと思えます。

R o a r 6

光の射さない薄暗い洞穴の中で、ローは空腹を堪えて考えていた。森から逃げ出して、数時間が経過している。辺りはすっかり暗くなってしまうて、今から狩りに出かけることは困難だ。空腹よりもローには気にかかることがあった。それは、誰が村の家畜を食い殺したのか、ということだ。もちろんのこと、ロー自身ではない。彼が村に下りたのは群れから追い出され、森でキノコを食べた時と、今日だけだ。

最初は、他の動物が食い荒らしたのだろう、と考えたがそれは却下された。なぜなら、カマラははつきりと「家畜を食い殺した狼の一匹」と言ったからだ。狼だとすれば、ローが追い出された群れの狼以外にない。けれども、村へ下りていくことは群れのリーダーであるアルファが許すはずがない。

彼にしては珍しく苛立ちを覚えていた。アマラと別れさせられただけでなく、家畜を襲った犯人として、濡れ衣を着せられてしまったのだから、当然と言えば当然だ。

「月でも見に行こうかな」

ローは立ち上がり、洞穴から出て行った。腹立たしい気持ちを落ち着ける、そんな目的があった。

いつものように、月の見える場所へと歩いて行く。時折空を見上げると、輝かしい星々が瞬いていた。これだけでも十分に心洗われるものだが、ローは誰かと会話をしたくて堪らなかった。アマラがいたなら、こんな思いをしなくて済んだだろう。

彼はまた、孤独に戻ってしまった。切ない気持ちが彼を包む。

夜空には丸い月がぽっかりと浮かんでいる。今日もローを優しい金色の光で照らしている。

「やあ、こんばんは。今日は散々だったよ。人間の女の子と麓まで下りて行ったら人間に見つかってさ。危うく殺されそうになったよ。いや、本当に危なかった」

月がうつすらと雲に隠れた。雲の隙間から、幻想的な光が漏れ出している。

「でもさ、そんな危ない事も気にならないよ。なんていったって、僕を認めてくれる存在に出会ったんだから。本当にすばらしい女の子だったよ。きっと、今頃村で怒られているんだろうなあ。そう思うと、少し胸が苦しくなるよ。それと、あの村の家畜を食い荒らしている狼がいるみたいなんだけど、君は何か知らないかい？」

月は何も答えない。ささやかな微笑を浮かべるだけだ。

「本当に誰なんだろう。もしかして、あの群れに何かあったのかな」
ローは、その場で丸まり自らの体に顔を埋めた。

「追い出されるかもしれないけど、久しぶりに群れに会いに行ってみようか」

ローは起き上がり、体中に付着した雪を振り落とした。

そして、群れの住む場所へとゆっくり歩き出した。

群れの狼たちが住んでいるのは、彼の洞穴から真っ直ぐに登って行った位置にある。しかし、そこへ辿り着くまでには急な傾斜を登り、足場の不安定な道を進んだり、一筋縄ではいかない道のりが待っている。しかし、ローは過去にそこに住んでいただけあって、すいすいと先へ進んでいった。

彼は追い返されるかもしれない、という不安も抱えていたが、今頃群れはどれだけの成長を遂げているのだろうか、という期待も抱いていた。成長しているのだとすれば、きっと素晴らしい群れになっているだろうと確信を抱いていた。

ローが群れに所属していた時は長にアルファが置かれ、その後継ぎとしてローを除く子供の狼が置かれていた。そして、それらの狼を中心に、数十匹の群れが構成されていた。今もそのまま構成さ

れているのか、さらなる繁栄があつたのか。それとも衰退しているのか。そんな期待と不安の両方を考えながら、サクサクと進んでいた。

「あそこを越えれば、辿り着けるはずだ」

懐かしい匂いが辺りに立ち込めている。同族の匂い、血の匂い、土の匂い、他にも色々な匂いが混ざり込んでいる。その匂いはローにとって心地よいが、人間が嗅げば不快になることは間違いないだろう。

ローはひよいひよいと傾斜を登って行った。昔よくここで遊んだものだ、と感慨にふけた。が、傾斜を登りきった先の光景を見た瞬間現実へ引き戻された。直視したくない現実が彼に牙をむいた。皆が仲良く、平穩に暮らし、活気に充ち溢れている。ローの期待が確信となる。そんな光景ではなかった。

ローの目の前には、ぐつたりと頂垂れた狼が数匹。それに既に肉の塊と化した狼が数匹、仲間同士で肉を取り合っている狼が数匹。何度目を閉じても、何度これは夢だと自分に言い聞かせてもその光景は変わることはなかった。彼の群れは、衰退の一途を辿っていたのだ。

「一体どういふことなんだよ。父さんは、兄さんたちは、一体何をしているんだ」

アルファが統率している群れに、こんなことが起こるはずがない。仮に彼が死していても、その子である、つまりローの兄にあたる狼が群れを統率しているはずだ。だが、この光景を見るに誰もこの群れを統率していないと考えられる。

ローは、何が起こったのか確認をするために、群れの中へと入って行った。彼の中に、追い出されたらどうしよう、などというような不安はなかった。それよりも、群れが心配で仕方がなかったのだ。彼が群れの中に入って行くと、群れの狼全ての視線が彼に集中した。彼が群れにいた時のような差別の視線ではなく、渴望の視線だった。誰も彼に襲いかかろうとはしない。

「おい、あの黒い毛色はローじゃないか」

「ローだ。ローが帰って来てくれたんだ。やっと、やっと希望が見えた」

そんな言葉が、口々に群れから飛び出した。ローはその言葉に不快感を覚えながらも群れの中を進んでいき、叫んだ。

「一体、どうしたって言うんだ。なんでこんな事になってしまっているんだ！ 父さんは？ 兄さんたちはどうしたんだ」

ローのその問いに、誰も口を開こうとしない。

「黙っていたら何も分らないだろう！」

ローのその怒声は、アルファの面影を感じさせるものだった。雄々しく、威厳に満ちていた。聞くものすべてを震え上がらせる。とても過去に群れを追い出された狼だとは思えない。

「私たちは」

一匹の狼が口を開いた。

「私たちの群れはもうお終いなんです」

「どういうことだ」

ローはその狼に近寄り、尋ねた。

「アルファ様はあなたがこの群れを追い出されて一年後にお亡くなりになりました」

ローは、自らの目頭が熱くなるのを感じた。だが、今は悲しみに暮れている場合ではないと判断し、さらに問いかけた。

「そうか、それは仕方がない事だ。それなら、兄さんたちはどうしたんだ」

「あなたの兄上は群れを捨てたのです。もうこの群れには統治するものがおりませぬ」

「群れを捨てただって？」

一瞬自分の耳を疑った。そんなことありえない、と何度も頭の中で言葉を反芻した。

「はい。あなたの兄上は、一切の群れを統治する力を持ち合わせていませんでした。当然獲物など狩れませぬ。次第に群れは廃れ、忌

まわしい二匹はこの群れを捨て、逃げたのです」

「なんてことだ」

「しかし、地獄はこれからだったのです。我々は必死に獲物を探し、何とか生き延びていました。そんな時に、あの二匹が群れに姿を現したのです。最初は我々を助けに来たのだ、と思いました。ですが、それは幻想でした。あの二匹は、数少ない食料をせしめていったのです。差し出さなかった場合、彼らは怒り、群れの狼を食い殺して去って行きました」

あたりに散らばる肉を見つめながら言った。

「なぜ抵抗をしなかったんだ」

「抵抗しても、勝てないからです。統治する力はないといえども、彼らはアルファ様の血をひいております。我々に勝つ術はないのです」

ローは怒りに震えていた。群れを捨てた身勝手な兄を恨んでいた。「そんな今あなたが来てくださいました。我々はずっと待ち望んでいました。あの立派なアルファ様の子供である、あなた様が群れを率いてください」

彼の怒りが、頂点に達した。それは、兄たちに対するものではなかった。その怒りは、群れの狼たちに向けられた。群れへの心配よりも、群れへの怒りが勝利した。

「勝手なことを言うな！ あの日、俺を追い出したのはどこのどいつなんだ。お前らだろう！ 俺は母を殺してなんていない、そんな俺の言い分なんて一切聞かなかった。ただ黒い、それだけの理由で群れを追い出したのは誰なんだ！」

彼の怒りに満ちた声に、すべての狼が飛びあがった。

「それは本当に悔いております。外見にばかり目を奪われ、盲目になつておりました。真に見るべきものを見ていなかった、我々が悪かったのです」

「俺はお前らを助けてやる気なんてない」

「では、なぜここに來たのですか！」

「麓の村の家畜が食い荒らされている。その原因が狼だと、村の間は言っていた。この地に俺たち以外の狼はいない。それでこの群れを見に来た。それだけのことだ。この現状を見れば、お前らが犯人だということは明らかだ」

「それは違います！ 我々は、アルファ様の言いつけを守り、この山でのみ獲物を狩り続けています」

「じゃあ誰がいるって言うんだ！」

「俺たちだよ」

ローが振り返ってみると、彼の兄、ロムスとレムスが崖の上から狼の群れを見下していた。何もかもを下等なものと見ている目だ。真っ白な毛を微かな月明かりで輝かせ、真っ赤な目をギラギラとさせている。その姿はとても神々しい。

「兄さん！」

「久しぶりだなあ。デキシコナイの弟よ」

ロムスが崖の上から飛び降りた。彼が着地した場所は大きくへこみ、雪が舞い散った。

「デキシコナイ！ デキシコナイ！」

狂ったように同じ言葉を連呼するレムスも、崖から飛び降り、雪を舞い散らせた。

群れの狼たちは、さっさと逃げてしまったようで、離れた場所からこちらのことを窺っている。ローはそれを横目で見ながら呆れた。「群れを追い出されたお前が、今更何の用だ？ この群れは見ての通り俺が統治している。見てみる。長である俺を恐れ、逆らおうなんて奴は誰一人いない。これほどまでに上手くいつている群れは存在しないだろうなあ」

ロムスは、周囲を見渡し、舌なめずりをしている。周囲の狼たちは恐怖に打ち震えている。彼らが、恐怖によって支配されていることは明らかだ。

「兄さんたちは群れから逃げ出した、という話をさっき聞きました。それに、統治しているというよりも、恐怖で支配しているように見えますが」

ローの言葉を聞いたロムスの表情が豹変した。さっきまで穏やかな顔をしていたにもかかわらず、今は鬼のような形相で遠く離れた群れを睨みつけている。

「そうかそうか、そんな事を言う奴がいたか。まるで俺たちは腰ぬけの独裁者だと言わんばかりだな」

ロムスは眉間に皺をよせ、目を細めた。

「弟よ。こんな馬鹿ども、口で言っても誰が長なのか理解出来ないんだ。それなら恐怖という形で体に擦りつけておく方が有効だろう？　そうは思わないか」

「父さんは、そんなことしていなかった」

「親父は親父だ。お前から見れば、あの親父はさぞ立派に見えたらうな。デキシコナイの自分を最後まで擁護してくれたんだからな。あんな糞甘い判断、俺には理解出来なかったねえ。俺ならデキシコナイは即刻殺しちまうところだ」

ロムスがローの周りをグルグルと回り始めた。いつでもお前を殺す準備は出来ている、そんなことを間接的に伝えている。

「それで、何の用だ？　統治者なら足りているぜ」

「麓の村の家畜を食い殺している犯人は兄さんたちなんですね？　なんでそんなことするんですか。父さんもそれは禁じていたでしょう？」

「腹が減っているからさ。それ以外に何の理由がある。親父が禁じていようと、今はいないんだ。そんな決まりに何の意味がある？」
「この山で狩りをすれば事足りるでしょう？　今までだってそれでやってこられたんです。わざわざ村まで下りて行って家畜を食らう必要はないはずです！」

ロムスはローを見つめ、物憂げな表情をした。傍から見れば考えを改めたかのように見えるだろう。事実、ローもロムスのその表情

に期待を抱いていた。だが、その期待は一瞬にして碎かれる。

「弟よ。こんなクス共を使って狩りなんて出来ると思つか？ こいつらはいつも俺の足を引つ張る。だから村まで下りて行って家畜を食らうのさ。苦労も何もねえ、最高だろう。たまに人間に見つかった時はここへ帰ってくれば、餌にありつける」

ロムスの言う餌とは、間違いなく群れの狼たちのことだろう。アルファの血を引く彼に、誰も適うはずがないのだ。今の彼らの怯えようからも容易に察することができる。

ローは込み上げてくる怒りを抑えた。冷静さを失えばどうしようもない。

「もう村の家畜を襲う事はやめてください。いつか彼らは怒ります。狼を駆逐すると言い出してもおかしくはありません。だから、そうなる前に群れをまとめてこの山で狩りをしてください。それが、群れのためにも、村の人たちのためにもなるのです」

ローの必死の嘆願だった。これ以上、アマラのいる村に迷惑をかけるわけにはいかない。正しく言うならば、アマラに迷惑をかけたくなかった。

「おいおい。やけに村の連中の肩を持つじゃないか。お前の大好きだった親父も嫌っていた人間のよ。さすがデキシコナイは言うことが違うぜ。甘すぎて反吐がでる。それによ、お前は誰に頼んでいるのか分かっていいるのか？ 俺はこの群れの長だぞ？ お前みたいなデキシコナイの、穢れたやつ命令なんて聞くかよ」

ロムスは一切聞く耳をもたない、といった風だ。その姿は、麓の森で出会ったカマラという男にそっくりだった。

呆れて言葉も出なかった。自らの生みの親であるアルファを侮辱するだけでなく、群れを己の食料としか見ていなかった。まさか、彼がこんな風になってしまうなど、誰が予想し得ただろうか。

「ほら、もう用は済んだだろう？ 真っ白な俺と会話できただけでも良かったろう。真っ黒な穢れたお前なんか触れて良い存在じゃあないんだ。あそこで怯えている奴らもそうさ。真っ白な俺に支配

されて、幸せなのさ」

真っ白なロムスから、真っ黒な言葉が吐き捨てられた。ロムスは白という言葉の清純なイメージからは大きくかけ離れた存在だ。ロ

ーはとうとう込み上げてくる怒りに耐えきれなくなり、叫んだ。

「あなたに、この群れを統治する資格なんてない！」

「なんだと？」

ロムスの眉間に、深い皺が刻みこまれた。

「己の利益しか考えない、見た目ばかりに捕らわれているあなたに、群れを統治する資格はないと言ったんです！」

「黙れ、デキシコナイが！」

ロムスは大きな前足を振り上げ、ローに襲いかかった。ロムスのするどい爪がローの右目に当たり、深く抉れた。ローの血液が、真っ白な雪を赤く染める。

「穢れたデキシコナイの分際で、俺に向かって統治する資格がないだど？ お前はいつからそんなに偉くなったんだ？ 言ってみろ！」

ローは痛み之余り、ロムスに返す言葉を放つことができない。

それどころか、片目の視力を失ったため、バランスをとることすらままならない。

ダメだ、殺される！

「もう、許さねえ。このまま俺たちの餌になっちまえよ。レムスお間が食うちまっても構わないぜ。こんな穢れたもの、口にしたくないからな！」

レムスが鼻を鳴らしながらローに近づいてくる。そして、大きく口を開けた。その時。一匹の狼の慟哭が雪山に響き渡った。

「オオオオアアア！」

レムスが悲鳴を上げて倒れたのだ。真っ赤な鮮血が辺りに霧のごとく撒き散らされた。なんと、遠くでこちらを眺めていた狼たちがレムスに襲いかかったのである。レムスは首を噛まれ、その後にも数匹の狼たちが彼の肉を食らった。

「ローさん、早く逃げてください！ あなたが死んだら、誰が群れ

を助けてくれるのですか！ さあ、今は逃げてください！」

ローは狼狽した。咄嗟の出来事にまったく動くことが出来ない。

「お前ら、デキソコナイどもが。覚悟は出来ているんだろうな！」

ロムスの怒りが頂点に達したようだ。レムスに群がる狼たちを次々になぎ倒している。そんななかでも、ロムスはローを鋭い目で睨み続けている。次はお前だ。そんな恐怖のメッセージが、その鋭い眼には込められていた。

「早く！ 早く逃げてください！」

数匹の狼がロムスに飛びかかるも、瞬時にして払いのけられた。そして、急所を噛まれ次々に倒れていった。その様子に恐怖したローは急いで駆けていった。ロムスという強大な存在を前に、恐怖という抗うことの出来ぬ感情に支配された。

逃げなきゃ殺される！

彼は必死で逃げた。

背後から聞こえる叫びも、唸り声も、すべてを振り払い逃げた。

この時、アマラの気持ちがかかったような気がしていた。彼らの叫びは、苦痛に満ちていた。これを聞き続けていれば、いずれ発狂してしまうだろう。アマラは常にこの恐怖に耐え続けていたのだ。

ローの逃げた後には、ルビーにも似た血痕が点々と残されていた。

薪のくべられた暖炉に、暖かい雰囲気のする木製の家具。ぼんやりとしたぬくもりを感じさせる蠟燭。木のテーブルに置かれたヘラジカのステーキとワインが食欲をそそる。

村の男たちは、そこで会議を開いていた。そこには、十数人の男たち、村の中でも特別に腕の立つ者がどつしりと構えている。どの人間を見ても、服が張り裂けんばかりの隆々とした筋肉が目立つ。その中でも一際体格の大きさが目立つ男が大声で話を切り出した。

「今日ここに集まっていたいたのは他でもない、あの忌まわしい狼を駆逐してやろうという話です」

会議を仕切っているのは、カマラだ。

「今日も、奴は森まで下りてきていました。きっと家畜を食らおうと思っていたのだろうと考えられます。これ以上、我々の家畜を食い荒らされては、我々の死活問題になり得ます」

カマラが、勢いよく両手で木のテーブルを叩いた。テーブルに置かれているワイングラスが少し宙に浮いた。

「カマラさん、ちょっと落ち着きな。今日は森まで下りてきただけなのだろう？ 他の動植物を食いに来たんじゃないのか？」

「確かにそうだぞ、カマラさん。森の動植物は我々のものというわけではない。奴らは、あの厳しい山で生活しているんだ。たまには下りてくるだろう」

男はヘラジカのステーキをナイフで丁寧に切り、フォークで豪快に口の中に放り込んだ。

「いや、カマラさんが追い出してくれなかったら、また家畜が食われてしまったかもしれないぞ」

「お前らは、家畜が食い荒らされても良いって言うのか？」

「そついうわけではないが」

皆が口々に自分の意見を言っている。これでは、会議というよりただの雑談である。

「静粛にしてください！」

カマラが秩序のない雑談に釘を刺した。暖炉にくべられた薪がぱちぱちと音を立ててはじける音だけが、男たちの空間に響きわたった。

「それだけはないのです。奴は、我が愛しい妹にまで手を出したのです！ 私が発見しなければ、アマラは食われていたかもしれないのです！」

その場にいる全員が目を見開いた。

「なんと、アマラが食い殺されそうになったと？」

「とうとう人にも危害を加えるようになっていましたか」

カマラの言葉を聞いた男たちは、また口々に語り始めた。

「どうですか、村の者たちよ！ これ以上放っておけば、終いには村の子供を老人を我々を襲うかもしれません！ 事は起こってからでは遅すぎるのです！」

両手を大きく広げ、声を荒げてカマラが言った。席に着いている男たちは全員が頷いている。カマラの意見に同意なのだろう。

「狼の居場所は掴んでいるのかね？」

「もちろんです。彼らが群れで生活している場所を何度も目撃しています。今までは甘く見ておりましたが、もう許せませぬ」

カマラは自信満々、といった風だ。ワイングラスを手に取り、一気に飲み干した。彼のワインを飲む様は、生き血を飲み干す化け物のように見える。

「俺はカマラさんに同意だ。狼がいても、何の得にもなりやあしない。奴らがいなくなれば、山の動物だって取り放題だ」

「俺も賛成するぞ！」

一人、また一人と狼を駆逐するという、カマラの意見に賛成していった。やはり皆、我が身が危ういとなると顔色が変わる。

「時はきた！ 今こそ、忌まわしき狼を駆逐してやるのだ！」

カマラの力強い一声で、皆の歓声が沸き上がった。

「決行は明日明朝！ 各自、準備を怠らぬよう！」

その時。部屋の扉がバンと音を立てて開いた。

「待って！ 私の話を聞いて！ ローを……狼たちを殺さないでいて！」

小柄な体に、金色の髪の少女。アマラだ。

「あの狼は、あの真つ黒な狼は違うのよ。昨日、私を洞穴に泊めてくれたの。とても良い狼なの。今日だって、私が森へ下りていこうって言ったから」

カマラはアマラの肩を持ち、たくましい体へ引き寄せた。

「アマラ、お前が優しい子だって言う事は分かっている。けどな、このまま放っておけば村の人たちが困るんだ。分かるね？」

アマラは、カマラの体を突き放して言った。

「分からないわよ！ あの子の声も、動物たちの声も聞いたことがないくせに！ あの子が、ローがどれだけ優しい狼かも知らないで！」

「さあ、落ち着いて。夜も遅いんだ、部屋へ戻りなさい」

「嫌よ！ 狼たちを生かしておいてあげて！ もう私は皆の苦しむ声を聞きたくないのよ！」

アマラは力一杯にカマラの胸板を叩いた。

「アマラ！ いい加減にしろ！」

カマラは、アマラを強引に担ぎ、彼女の元いた部屋へと押し込んだ。そして、頑丈そうな錠をかけ、溜息を一つした。村の人間たちすべてに哀れみの表情が浮かんでいる。

「いや、お見苦しいところを見せてしまい本当に申し訳ない。前にもお話したとおり、妹は自分が動物と話せると言い張っておりまして。そんなことが出来るはずがないのに、まったく困ったものです」

その場から大きな笑いが沸き起こった。誰も、アマラが動物と会話できるなど、考えてもいないのだ。すべて、虚偽妄言だと思っっているのだろつ。扉の向こうからはアマラの叫び声が聞こえている。

が、それは男たちの笑い声にかき消された。

「それでは皆さま、また早朝に」

鶴の一声とはこのことか。彼の言葉を受けた村人は、さつさと自分の家に帰って行った。

「ちよつと、兄さん！　ここから出してよ！」

アマラが扉を割らんばかりの力で叩いている。

「黙るんだ、アマラ。この村の恥さらしが。お前が俺の妹でなければ殺してやるところだ。何が動物の声が聞ける、だ。笑わせるな。狼を狩り終わるまで、ここは開けない。せいぜい、動物さんとお話でもしておいてくれ」

カマラはそう吐き捨てると、階下へと降りて行った。

アマラは頭を抱えた。何とかして、ローにこのことを知らせなければならぬ、という使命感に燃えた。自分を出来損ないと呼ばなかった、自分を肯定してくれたローとその仲間たちを守ってやりたかった。

アマラは、部屋の中をきよろきよろと見渡した。この部屋で脱出に使えるような場所は二ヶ所存在した。

一つはアマラがもたれている、さつき錠をつけられた扉。

そしてもう一つは、窓。ここは三階に位置するため、落ちれば怪我では済まないかもしれない。

彼女の決心は、揺るがなかった。

R o a r 8

真つ暗な洞穴の中で、何かが喘ぐ。

息は荒く、姿こそ見えないものの、猛獣のごとき威圧を感じる。

その洞穴には、右目から血を流したローの姿があった。

彼の足もとには、薄らと血がたまっており、彼の傷が深い事を思わせる。ローは今、後悔の念に包まれている。

何故、あの時快く群れを率いることを了承しなかったのか。

了承していれば、彼らの心を救う事が出来たのではないのか。

何故、ロムスが彼らをクズ呼ばわりした時に否定しなかったのか。否定していれば、彼らに勇気を与えることが出来たのではないか。

何故、逃げ出してしまったのか。

逃げなければ、ロムスを追い払う事が出来たのではないか。

そんなどうしようもない事が、彼の脳に焼き付いていた。この思いは彼の中でループして、彼を苦しめ続けた。決して逃れることの出来ない後悔の輪だ。

「俺こそ群れを率いる資格なんてないな」

彼は、自分の恨みや辛みで群れを見放してしまった。己の利己心だけで動いていたロムスと大差ないと考えた。ロムスに、群れを率いる資格はない、と言ってしまった自分をひどく嫌悪した。彼の心は、粉々に砕け散っていた。

ローはふらりと立ち上がり、いつもの場所に、月の見える場所へと赴いた。ほぼ無意識の行動であった。

しかし、その場に月はなく、ただただ漆黒の闇が広がっているだけだった。空には分厚い雲がかかり、雪が舞い散っていた。雪は彼の悩みなんて知らずに、無邪気に踊っている。

「君も僕を嫌つかい？ 自分の利己心を優先した僕を。我が身しか省みなかった僕を」

月は光すら発さない。

月がローのことを天から見下し、苦悩する彼を嘲笑っているかのように感じられる。

「そうだよ。そんな僕を嫌わないでいてくれるはずがないよね。とうとう、君にまで嫌われちゃったか。僕は、これからどうすればいいんだろう？」

闇だけが夜空を侵食する。

「ねえ、答えてくれよ」

静寂が彼を包む。

「きっと、君なら戻って戦えって言っただよね？ でも、出来ないんだ。僕は出来損ないなんだ。群れ一つ守ることが出来ない出来損ないなんだ」

彼の脳裏に、ロムスが襲いかかってきた時の光景が浮かぶ。彼は、それを振り払う事が出来ないでいた。絶対的な恐怖。生物がもつ本能だ。ローは遠吠えをした。

何もない虚空に向かって。

その遠吠えに、どんな感情が込められているのかは知る由もない。「ロムスの言ったとおりなんだ。僕は真っ黒な、穢れた出来損ないなんだ。僕は、救いようのない……」

「出来損ないなんかじゃないわ！」
聞き覚えのある声がローを貫いた。

「え？」

ローが振りかえると、足を引きずり、息を切らしながらこちらに歩いてくるアマラの姿があった。綺麗な金色の髪は乱れ、服は所々が破けている。

「どうしたんだ、アマラ。その足にその服」

彼女は、あの後窓から飛び降りたのだ。雪がクッションになったからか、足をくじいた程度で済んだようだ。

「私のことなんてどうでもいいわ！ あなたこそどうしたっていうのよ、その目」

「なんてことはない」

「嘘！ 早く手当てをしないと」

アマラは、腰に下げた袋から包帯を取り出し、彼の目に巻きつけた。包帯が彼の血を吸いこみ、じわりと赤く染まった。

「これで大丈夫」

彼女は満足気だが、包帯の巻かれたローの姿はとても不格好だ。包帯の巻き方は、決して丁寧とも上手とも言えない。

「ありがとう」

「いいのよ。それよりも聞いて」

ローは、アマラの慌て様を尋常ではないと悟った。そして、彼女の言葉に静かに耳をかけた。

「あなたと、あなたの群れが危ないの！」

「どういうことだ？」

「私たちの村の人たちが、狼を殺すためにこの山へ来るの！ 急いであなたの群れを移動させないと、皆殺されちゃう！ 今日の朝にはここへ来るって言ってた」

ローはその言葉に衝撃を受けた。自分が麓の森へ下りて行ったこ

とが原因だと悟った。更なる後悔が彼に重く押し掛かり、そして、その重みで彼の心はぽつきりと折れた。

「俺には無理だよ」

「なんでよ！ 危機を伝えて逃げなきゃ彼らは……」

アマラの言葉をさえぎり、ローが語り出した。

「この目はな、さっき群れの長と戦った時につけられたんだ。そいつは俺の言葉になんて耳を貸さない。それどころか、俺を見つければ殺しにかかってくるだろう。それに、俺は出来損ないなんだ」

ローは頭をたらし、洞穴へと歩き出した。

「そんなことない！」

「それに、俺はここで隠れていれば助かる。わざわざ危険な目にあつてまで、伝えることじゃない。俺は戦いから逃げ出した臆病者だ」
「あなたの仲間じゃない！ どうなつてもいいって言うの？」

「どうなつてもいいわけじゃない。でも、今行けば、殺されるんだよ。俺だって、死ぬことが怖いんだよ」

彼の心の底から、恐怖の感情がこみ上げる。それと同時に、群れの狼たちへの憎悪の感情が込み上げてくる。しかし、助けたいという感情がないわけではなかった。

「今、行動を起こさなくていつ起こすって言うのよ！ そうやっているうちに、すべてが取り返しのつかないことになるわ！ すべて終わってから、悲しみに暮れたつてもう遅いのよ！」

割れんばかりの声でアマラが叫ぶ。

「俺は黒いから出来ないんだよ」

次第に闇は裂け、山の麓から朝日が差し込み始めた。村では武器を整え、山へ登ってくる時間だろう。もう一刻の猶予も許されない。
「ロー！」

彼女の声が山に響く。アマラの顔が、みるみるうちに悲しみに染まっていく。そして……。

パン、と音がした。アマラがローに平手打ちしたのだ。

「何をするんだ！」

ローは牙をむき出し、アマラを威嚇した。しかし、アマラは威嚇をもものともせず言葉が続ける。

「黒いからなんだっていうのよ！ それが仲間を助けられないっていう理由にはならないわ！ ローは色にばかり目をやって、見なきゃいけないもの見てない！」

アマラが大粒の涙を流した。それが雪の上へと零れ落ちると、美しく散った。

「アマラ」

「もういいわ。あなたが行かないなら、私が行く」

アマラは足を引きずり、雪山を登っていく。いつ雪山から転げ落ちてもおかしくないほどにふらついている。

「待てよ、アマラ」

「臆病者に用はないわ！ 私が危機を救ってみせる」

「お前に何が出来るって言うんだよ」

「何も出来ないかもしれない。けど、指をくわえて震えているだけのあなたよりかはマシよ」

「殺されるだけだぞ」

「私は何も怖くないわ。臆病者のあなたと違ってね。そんなだから群れから追い出されちゃったんでしょね」

その言葉に、ローの怒りが沸点に達した。煮えたぎる怒りがローの心に激流のごとく流れ出してくる。

「お前に何が分かるっていうんだ！ 死と隣り合わせの恐怖も、飢えの苦しみも、黒い、穢れていると言われた俺の気持ちも、群れに對する怒りも、お前は何も分からないだろう！」

ローは怒り狂い、アマラの細く白い腕に噛みついた。彼女の腕からは真つ赤な血が溢れ出している。しかし、アマラは表情一つ変えずに、やめなさい、と一言言った。その言葉には、少女とは思えな

いような意志が内包されているように感じる。ローが噛みつくことを止めると、アマラはこう続けた。

「そうね、私には何も分からないわ。でもね、これだけは分かる」
一瞬、あたりが静寂に包まれた。

「色なんて重要なことじゃない。あなたにしか出来ないことがある。真っ黒なあなただからこそね。それがあなたの群れを救うことなんじゃないの？」

ローははっとした。アマラの姿が彼の母親と重なった。アマラの放った言葉と似たような言葉を母親から言われたことがあることを思い出した。憎悪に燃えていた群れの狼たちと今の自分の姿も重なった。今のまま逃げていれば、あの時と何も変わらない。今の自分のはあの時の群れの狼たちとまったく同じだ。色の違いを重要視し、怒りと憎しみに身を任せている。

アマラの言葉に、とうとう彼は決意を固めた。

そして、彼はアマラの方を見ずに、黙って走り出した。

彼は風のごとく駆けた。

彼はしっかりと大地を踏みしめ駆けた。

彼は朝日を食いちぎり駆けた。

周りの景色など見えない。

恐怖の感情はない。

ただ、自分を捨てた群れを自分を認めなかった群れを救いたい。そんな一心で彼は駆けた。

「ロー。絶対に救ってあげてよ」

アマラは、悲しげな瞳で彼の向かった方角を見つめていた。

R o a r 9

降り積もった新雪を蹴り、
切り立つ崖を超え、
大きく開いたクレバスを渡り、
必死に彼は駆けた。

そしてローは、ロムスの支配する群れへと辿り着いた。
彼が辿り着いた時には雪は止み、太陽がしっかりと顔を出していた。

雪上には鮮血が散り、肉の食い荒らされた跡がある。恐らく、ロムスに刃向かった狼たちとレムスの残骸だろう。息をする度に血生ぐさい臭いが鼻を刺激する。辺りを見回すと、十数匹の狼たちが眠っている。まだ、生き残っている狼はいるようだ。狼たちが全滅していないことに、ロー安堵した。

ローは小高い丘に登り声をあげた。

「みんな、聞け！ 今から数時間後に村の人間たちがやってくる！
そいつらは俺たちを殺そうとしている！」

急な叫びに、狼たちは飛び起きた。それはロムスも例外ではないだろう。

「このままここにいては危ない！ 今すぐにどこか別の場所へ移動するんだ！ 何をしているんだ。早く！」

ローの声は聞こえているはずだ。だがしかし、誰一人としてその場を動こうとしない。

「ははは。死に損ないが戻ってきやがったか」

ロムスが小さく唸りながら、洞穴から歩いてくる。その姿は自信に満ち、なにも恐れていない。

「こいつらは動かねえよ。ここから逃げれば殺す、と前々から釘を刺しておいているからな」

ロムスは高らかに笑っている。群れの狼たちにとって、逃げても殺されるし、逃げなくとも殺される。進んでも地獄、戻っても地獄なのだ。

「こいつの言うことなんて聞くな！　ここにいても殺されてしまう！　早くここから逃げるんだ！」

「こいつだと？　デキシコナイの分際で、なんて口の聞き方だよ。まったく賤がなってねえなあ」

「構うな！　早く行け！」

ローの必死な叫びに心打たれたのか、一匹の狼が駆けだした。それを見た狼が、一匹、また一匹と駆けだした。群集心理というものがよく分かる光景だった。

「お前ら！　誰が移動を許可した！　俺じゃなく、そんな穢れたデキシコナイに従うっていうのか！」

あつという間に、すべての狼がその場から離れた。彼らがどちらに従ったのか、火を見るよりも明らかである。

「このデキシコナイが。これは俺の群れだ！　どうなるか分かってるんだろうなあ？」

ロムスは目をギラギラと輝かせている。

「この群れはあなたのものじゃない。僕は、もう何も怖くない。出来損ないだと言われても、穢れていると言われても、僕は構わない。僕を認めてくれる存在がいるから！」

ローは高らかに遠吠えをして、ロムスに向かって一直線に駆けて

いった。もう何者にも彼を止めることは出来ない。

ロムスも負けじと遠吠えをして、ローの方へ向かって行った。

二匹の声は大地を震わせ、他の動物をも震え上がらせた。降り積もる柔らかい新雪がさらさらと崩れていく。

勢いよく駆けていったローは、ロムスを押し倒し、噛みつくようにした。が、その勢いを利用され、ローは後ろへと弾き飛ばされた。

「甘いんだよ、デキシコナイが！」

今度はロムスがローに襲いかかった。巨大な口開き鋭い牙を剥き出しにして。ロムスの姿は神話に登場する巨大な狼のそれを思い起こさせる。

雪の上に倒れているローは、かろうじて彼の巨大な牙の一撃を避けることが出来たが、彼の鋭い爪が腹部へと突き刺さった。

ローは苦痛を露わにした。

ロムスの体重が、彼の爪をじわじわとローの体へ押し込んでいく。圧倒的な力の差を見せつけられた。同じ父親の血をひいているにもかかわらず、これほどまでに力の差が出るものか。ローは身体をくねらせ抵抗してみるが、深く突き刺さった爪が食い込むだけだった。蠟燭の火を見るかのように、ローの力はなくなっていく。

「はは。やっぱりお前はデキシコナイだ。毛が黒いだけじゃなく戦ってもこれほどまでに弱い」

ローの上から勝ち誇った笑みを浮かべている。

「分相応に生きろよ。今すぐにお前も母親のようにしてやるよ」

ローは閉じかけていた瞳をパツと見開いた。何かが彼の中で覚醒したような。

「なんだって？」

息も絶え絶えにローが尋ねる。

それを上から見下し、舌なめずりをしながらロムスが答えた。

「お前の母親を俺の父の親を殺したのは俺さ」

「なんで、なんでそんなことを」

「デキソコナイのお前をいつまでも擁護して、不愉快極まりなかったからさ。真つ白な俺よりも、穢れたお前に愛情を注いでいた。俺がどれだけ頑張っても、お前ばかり。それがどれ程不愉快なことだったか、お前に分かるか？ ああ、あの時お前もさっさと殺しておけば良かったかもな」

彼らの母親を殺したのは、ロムスだった。

彼の母親は、己の命の灯火が消えるまでローを愛し続けていた。彼の事を出来損ないだとか、穢れている、などということを、一度たりとも口にしなかった。ローにとっては光だったが、ロムスにとつては闇だったのだ。母親という存在が、煙たくて……欲しくて仕方がなかったのだ。歪んだ愛は残酷なものだ。

ロムスの言葉で、ローの体中に巡る血液が沸騰した。

彼の閉じかけていた瞳は輝き、力の薄れた体には大きな力が湧き出てきた。そして、勢いよくロムスの体を弾き飛ばした。

爪の刺さっていた腹部からは血が流れていたが、ローは痛くも痒くもない、という顔をしている。今のローは痛みすら感じなかった。母親を殺し、自分を追い込み、村の家畜を食い荒らし、群れを破壊に導いたロムスを憎んでいた。何者にも消すことが出来ない、憎しみの炎が彼の中で燃え盛っていた。

「なんだ、怒ったか？ あんな馬鹿な親を殺した程度の事で」

ローは何も答えない。何も語らぬ彼の瞳からは、揺るがない決意が感じられる。

彼の真つ黒な毛に付着した純雪が雲の隙間から射す太陽の光を受け、金色に光り輝いている。ローの姿は、月の様に金色に輝いている。そして、頭を低く下げ、彼は光芒の矢の如く、ロムスに向かつていった。そして、ローの爪がロムスの体をかすめた。ロムスの体から赤い血が流れ落ちる。

「なんだ、お前も戦えるのか。面白いじゃねえか！」

ロムスも負けじと爪を振り下ろす。だが、その攻撃はローの体をかすりもしなかった。先程までのローとは明らかに動きが違う。アマラの言葉でわだかまりが消え、ロムスの言葉で彼の過去が燃え上がり灰となったのだ。もう彼に迷いはなかった。

だが、ローの素早い動きも長くは持たなかった。初めに受けた目の傷に、腹部の傷。それらが彼の体力を奪っていった。徐々にローの動きは鈍くなり、ロムスの攻撃を避けるだけで精いっぱいな状況に追い込まれた。

「さっきの威勢はどうした？」

ロムスの言葉は余裕に満ちていた。だが、ロムスは攻撃の手を緩めることはなかった。どれだけ弱い存在にも全力を注ぐということが彼のポリシーであるからだ。

ロムスの鋭い爪がまたもローの体をかすめた。ローは精も根も尽き果てた状態になろうとしていた。

その時である。昇りかけていた太陽が分厚い雲に覆われ、辺りに漆黒のカーテンが降ろされた。光は完全に遮断され、ローの姿は闇に擬態して見えなくなった。その状況に慌てたのはロムスである。

「くそ！ デキソコナイめ。どこへ行きやがった！」

ロムスは怒り、あたりを手当たり次第引っ搔いてみるが、何の手ごたえもなかった。

しめた！

予想外の状況に狼狽するロムスをよそに、傷だらけのローはひっそりとロムスの背後へと回り込み、思いつき引っ搔いた。ロムスの叫びが雪山を揺らす。ロムスが慌てて背後に攻撃を仕掛けるも、そこにローの姿はなかった。

ローは縦横無尽に闇の中を掛けた。この機会を逃せば勝機はない。そう感じた。ローは攻撃を何度も繰り返し、ロムスを翻弄した。

ロムスの傷がローと変わりなくなってきた頃。天はローを見放した。闇が裂け、雲間から眩いばかりの光が差し込んできたのだ。その光のせいで、ローの姿は白日のもとに晒された。ロムスを仕留めるまでに、後一步というところだった。

「はは……そこにいやがったか。もう終わりにしようぜ」

ロムスにはやりと笑い。ローに狙いを定めた。全精力を一撃に賭けるつもりようだ。ローも覚悟を決めた。二匹はまったく同じ攻撃の態勢をとり、互いに睨みあった。

とうとう決着の時がきた。

そして二匹同時に口を開け、互いの首元へ飛び付いた。

「があああああ！」

叫びをあげたのはロムスだった。

ローは、体にあらん限りの力でロムスの首に噛みつき、その肉を食いちぎった。

ロムスの真つ白な毛は鮮血に染まり、彼の苦痛に満ちた叫びが山中にこだまする。そして、真つ赤な雪上に倒れ伏したロムスは、血袋と化し、ごうごうと燃えていた命の灯火はサッと消えた。ローは勝利したのだ。

しかし、すべての力を出しきったローも、ロムスと同じようにその場に倒れた。彼の命の灯火もまた、消えようとしていた。

何やら轟音が聞こえてくる。

山の頂から、すべてを飲み込む音が。

雪崩が迫ってくるのだ。

原因はロムスの発した最後の叫びと降り積もった新雪、それに彼らが戦った時の振動だろう。

アマラが危ない。助けなくちゃ。

ローは薄れゆく意識の中で考えた。

大事な人を最後の最後まで守り抜こう、と。

ローは力を振り絞り、大きな遠吠えをした。

アマラに危険を伝えるために。

自分を認めてくれた、大切な人を救うために。

命の灯火を燃え上がらせ、彼女の為に黒い咆哮を……。

村の男たちは、順調に歩を進めていた。カチャカチャと武器同士が擦れ合う音が響く。鳴り響く金属の音と、男たちの臭いがとても不快である。彼らは殺気に充ち溢れ、自然と早足になっている。

「もうそろそろ狼の群れに辿り着くはずです」

「それにしても、さっきから狼の遠吠えがよく聞こえてきますね。何かあったのでしょうか？」

「そんなこと関係ないでしょう。吠えていられるのも今のうちだけです。もししばらくすれば吠えたくとも吠えられなくなりますとも」

カマラは微笑を浮かべた。

「ん？ あれは」

カマラの視線の先には、その場で立ち尽くすアマラの姿があった。カマラはアマラの元へ駆けて行き尋ねる。

「アマラ！ 何でこんなところにいるんだ！ それにその格好」

「兄さん」

彼女は、ローが駆けて行った時からずっとここで祈っていた。どうかローが助かりますように、と。度々聞こえてくる悲痛な叫びに、彼女は身を震わせていた。

「どうやって部屋から抜け出したかは知らないが、早く家へ戻るんだ。俺たちはこれから忌まわしい狼を狩りに行くのだから」

ウオオオオオオオン。

狼の遠吠えだ。

「ロー？」

彼女は少し前へ進み、耳を傾けた。

「ちっ、また狼が吠えていやがる。なんて忌々しい」
カマラが露骨に嫌悪感を剥き出しにしている。

「……………れ？……………ろ？」

アマラがぶつ切りの言葉を発した。彼女は更に前へと進んでいき、聴覚を研ぎ澄ませた。

「どうした？ アマラ」

ウオオオオオオオン。

「雪崩……………早く逃げる……………」

「何を意味不明な事を」

アマラはハツとした。雪崩がくる、ローがそう伝えているのだ。

「兄さん、皆！ 雪崩がくる！ 早くそこの洞穴へ逃げて！」

「は？ 誰がそんなことを言っているんだ」

カマラが辺りを見回してみるが、当然自分たち以外に人はいない。
「兄さんが森で見かけた真っ黒な狼、ローよ！ 彼は私たちに危険を知らせてくれているのよ！」

「そんなことがあるわけ……………」

「そんなことあるのよ！」

「いつまで戯言を言っているつもりだ！ 狼が危険を知らせてくれるわけがないだろうが！」

カマラのその言葉に、男たちも口を揃えて彼女に暴言を投げつけていく。その暴言の集中砲火は、ローが過去に受けたものと類似している。

「お願いだから！ 一度でいいから私の言うことを聞いて！」

彼女の目から、大粒の涙が溢れ出した。涙は女の武器だ。

それを見たカマラは大きいため息をついた。

「仕方ない。多少作戦に遅れが出てもいいだろう。皆その洞穴へ入るんだ！ 急げ！」

村の男たちは渋々といった風な顔でいそいそと洞穴の中へ入っていった。カマラはアマラを担ぎ、洞穴へと入っていった。

彼らが洞穴へ避難し終わると、轟音とともに雪崩が押し寄せた。すべてを飲み込む、白い悪魔が大地を侵食していく。

「そんな馬鹿な！ 本当に雪崩がくるだなんて」

避難が後少しでも遅れていたならば、彼ら全員が雪崩に食い殺されていただろう。白い悪魔が過ぎ去った山には、彼ら以外に何も残らず、すべてを白く染め上げた。

「アマラ、森へ行つて何か採つてきてくれないか」

不精髭を生やした男が斧を片手に言う。隆々とした筋肉がとても美しい。彼は、アマラの夫となった男だ。

「わかったわ」

金髪の女性、アマラが元気よく返事をした。

雪崩のあつたあの日。狼を駆逐しようとしていたあの日。彼女たちは村へと帰還し、雪山で起こったことを村人全員に話して聞かせた。黒い狼が私たちを救ってくれた、と。

その狼の言葉を皆に伝えたアマラは、村の人間たちから深い謝罪を受けた。それからというもの、狼を駆逐しようなどという提案は一切起こらなかった。それどころか、極力自然のもので生活をしていこうという方針に変更され、狩りを行うことはごく稀となった。

その後、彼女は大人になり、数年後には結婚をした。今では子供を二人授かり、絵に描いたような幸せな生活を営んでいる。

あの日から今まで、彼女はローのことを考えなかった日はなかった。彼のことか心配で心配でならなかった。あの雪崩で生きているとは考えられないが、だからと言って死んだと決まったわけではなかった。アマラはローが生きていると信じていた。

「準備はこれくらいでいいかな」

アマラはあの時に携えていた袋を腰にぶらさげた。彼女が家から出て行こうとすると、家の隣に建てられている小屋で、兄のカマラが木彫りに精をだしていた。

「兄さん、それは？」

「ん？ ああ。あの時の狼をモチーフにした木彫りの像でも彫ろうかと思つてな。今さらではあるが、追悼の意味も込めてな」

カマラが柄にもなく申し訳なさそうな顔をしている。しかし、そんなことは気にも留めずにアマラが言つた。

「きっとローは生きているわ。だから追悼じゃなくて、他の意味に変えておいてね。それに、兄さんはローのことを何も知らないのね。ナイフを貸してみて」

アマラはナイフを手にとると、木彫りの狼の背に小さな円形を掘り出した。一部だけ、異様な雰囲気醸し出している。

「ん？ これは何だ。えらく不格好だが」

「ローはね、背中の方が禿げているのよ」

アマラは小悪魔のような微笑を一つして、行つてきます、と家を出て行つた。兄や夫の前では明るく振る舞っているが、彼女の心のうちにはいつも黒い雲が浮かんでいた。もしかすると、ローは死んでしまったのではないかと。

彼女は森へと繰り出し、雪の上を進んだ。大樹からさらさらと雪が舞い散っている。あの時も、似たような光景だった。

時折、地に落ちた枝を踏むとパキンと音がする。その音が、妙に悲しみを誘う。あの時、森に行つた記憶が今でも鮮明に彼女の頭の中に刻みこまれている。

「ええっと、何があるかな」

アマラはきよろきよろと白と緑で構成された世界を眺めた。

すると、目にも鮮やかなキノコが生えていた。一度は食してみたと思うような、すばらしい見た目だ。

「あ、あれは食べられそう」

アマラはキノコを手に取り、眺めてみた。キノコの芳醇な香りが彼女を包む。

「あ、これは確か毒キノコだったっけ。食べると体が痺れるんだって、ローが教えてくれたんだよね……」

熱い涙が彼女の頬を伝う。

アマラは長い金髪をかきあげ、その場にしゃがみ、自分の両手に顔を埋めた。涙が井戸水のようにとめどなく溢れ出す。

パキン！

アマラの背後から、枝の折れる音がした。人の気配ではない。猛獣かその類の動物か。彼女の体は、自然と硬直した。

彼女は涙を拭い、恐る恐る振り返るとそこには……。

そこには真つ黒な、二匹の子供の狼たちが真ん丸な瞳でこちらを見つめていた。

彼女の黒く濁っていた心の空は、青く澄み渡った。

そして、アマラはまた涙を流した。あの時の夜空に輝く星のような涙を彼女はいつまでも流し続けた。

R o a r 11（後書き）

黒い咆哮はこれにて完結です。

いかがでしたでしょうか？ お見苦しい点が多くあったかと思いますが、最後までお読みいただいて、本当にありがとうございます。

余談になりますが、この作品は人種差別をテーマにして書いています。どの色の狼がどの人種にあたるのか、読んだ内容を思い出してみると面白いかもしれません。

それでは、一ヶ月と少しという短い期間でしたが、お付き合いありがとうございました。

読者の方と、創作活動を愛するすべての人に感謝と敬意をこめてまた、次回作でお会いしましょう。

お疲れさまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0582m/>

黒い咆哮

2010年10月8日10時51分発行